

おいしいの魔法

奄美市立笠利中学校 三年 伊瀬知 美央

太陽がジリジリと森を照りつけます。もわんとした熱風が森を包み込む季節です。もう夏です。ここは、レストランガジュマル。今日もルリカケスのネリとカナが仲良く働いています。

「見て見てえ、新作のハイビスカスゼリー。隠し味は小さく刻んだマンゴー。どうかしら。」

ネリがワクワクした声で言いました。ネリの手には、おひさまを閉じ込めたように真っ赤なゼリーが握られています。

「透き通っていて涼しげね。私も食べたあい。」

食いしん坊のカナが鼻をひくひくさせて言いました。一番忙しいお昼が過ぎてお客さんが減った今、二人はおしやべりをしています。カランコロン。音を立ててドアが開きました。

「あら、こんな時間にお客さん。ちよつと見てくるわね。」

カナがすくつと立ち上がって言いました。

玄関には、キョロつとした瞳のコノハズクが立っています。この村の村長である、ツツ村長です。カナは少し

驚いて、

「あ、あら、村長。どうかなさいましたか。」

と言いました。

村長は、

「いやあ、実はですね。この前、孫が生まれたんですよ。もうそれが、本当に可愛くて可愛くて。私はおじいちゃんになったんですよ。クフツ。」

と目をキラキラさせて言いました。あとから様子を見に来たネリが、

「村長。お孫さんが生まれたんですか。」

と目をぱちくりさせて言いました。村長は、少し頬を赤く染めて、

「ま、まあそういうことですよ。はい。それで、今度娘と孫は村へ帰っちゃうんですよ。はい。せっかくだしパーティーを開こうと思って。ここで開きたいんですけど、いいですか。料理はお任せしますんで。コホッ。」

ネリとカナは、初めてのパーティーの依頼に胸が高鳴り、店いっぱい響く声で、

「はい。お任せください。」

と元気よく言いました。村長は、嬉しそうに予約表にサインをして帰っていきました。

村長が帰った後、心配性のカナは、

「ネリ、どうするの。お任せだから何を作るか考えない

と。」

とドキドキした声で言いました。

「せっかくだし、栄養があつてお土産にできるものがないな。そして、この町で採れたものをたっぷり使いたいな。ううん。何だろう。」

ネリが、考える仕草をしながら言いました。

「アイスはとけちゃうし、村長はクツキー苦手だろうなあ、ご飯の方も考えないと。和食と洋食、どっちがいいだろう。」

二人は、ぎゅつと目を閉じて考えました。すると、カラシコロシ。音を立ててまたドアが開きました。カナは考えるのを一旦やめて玄関に出ました。玄関には野イチゴのように赤い羽根を持つアカヒゲがずらりと並んでいました。近所で帽子屋さんを開いているアカヒゲの大家族です。

「こんにちは。カナちゃん。今日はね、ベニの誕生日だからね。ケーキを買いに来たの。」

お母さんのピヨがニコリ笑い言いました。

「あら、ベニくんお誕生日なの。おめでとう。」

カナもピヨにつられてニコニコしながら言いました。

「僕、ハイビスカスのゼリーケーキがいい。」

「ママ、マンゴーたっぷりのタルトはどう。」

「タルトの気分じゃないよお。パッションフルーツとた

んかんのフルーツパイがいい。」

「ほら、今日はベニの誕生日でしょ。みんなには今度買うから、ベニに選んでもらおう。」

お母さんのピヨが、少し困った顔をして言いました。それでもみんなは譲りません。どうしようとカナが思っている、

「ママ、ちよつとずつ買おうよ。僕、みんなが幸せな誕生日の方が嬉しいよ。」

ベニがピヨをトントンしながら言いました。

「いいの、ベニ。」

ピヨが目をパチパチさせながら言いました。ベニは、こくと大きくうなずきました。

「ちよつとずつ。」

カナは、アカヒゲの家族を見送った後、呟きました。パーティーのヒントになりそうな言葉だったからです。ピコシと音を立てるようにカナの頭にいい考えが浮かんできました。カナはネリの所へ走り出しました。

「ネリ、ネリ、そうだよ。ちよつとずつにしたらいんだよ。」

カナは、少し困った顔をしているネリに飛びついて言いました。

「バイキング、バイキングにしようよ。みんなが美味し

くお腹いっぱいになるよ。」

カナは大きな声で叫びました。それを聞いたネリは、はっとしたような顔をして、

「そうだ。バイキングだ。さすがカナ。みんな絶対喜ぶよ。」

と目をキラキラさせて言いました。

そこからネリとカナは大忙し。パーティーを成功させるための準備を始めました。

おひさま色のマンゴー、とろつとろに熟したパッションフルーツ、瑞々しい色をしたパイヤ。材料はもうそろっています。コンコンカチャつと卵を割り、くるくるとかき混ぜ、トントントンと野菜を切ります。冷蔵庫に入れたり、オーブンで焼いたりしたら、ほら完成。ふわふわのたんかんケーキ。半熟卵がトロつとのったハンダマとパイヤの炒め物。元気が出ること間違いなし、隠し味は甘いマンゴーのハヤシライス。他にも美味しそうなごちそうがずらりとテーブルに並んでいます。ほわほわほわと春の野原のように温かな香りが部屋を包み込みます。

「できた。」

ネリは満足げに呟きました。カランコロン。大きく音を立ててドアが開きました。ネリとカナは頭のリボンをキュッと結び直して、

「いらつしやいませ。」

と元気よく言いました。玄関には、村長をはじめとしたコノハズクがずらりと並んでいました。その中には、くりくりとした目の赤ちゃんもいました。ネリとカナは用意してあったろうそくに火をつけ始めました。ろうそくの光が静かに優しく部屋を照らしています。わあつという声に二人は胸がじんわりと温かくなるのを感じました。さあ、楽しいパーティーの始まりです。みんなが楽しそうにおしゃべりをして料理を食べていることが嬉しくて、ネリとカナはふんわりと笑い、顔を見合わせました。パーティーは大成功。幸せそうな笑顔は、みんなの大切な宝物になりました。

今日も、ネリとカナのレストランには、温かい香りが広がっています。ネリとカナの作る幸せを願う気持ちでいっぱいのごちそうは、いつもみんなを幸せにしています。